

福岡に英語漬けシェアハウス 不動産ベンチャーたちの挑戦

2014年08月12日 03時00分 更新

記者：川合秀紀

福岡市博多区の会社寮だった建物を舞台に、異例づくしの挑戦が始まっている。

11月をめどに改装オープンする「Discovery Hakata South」。日本、福岡にいながら留学や語学学校に通うような、生きた英語を学べる「英語漬けシェアハウス」に生まれ変わる。複数の住民が一つの物件に同居するシェアハウスは福岡でも増えているが、「英語学習」を目的とするシェアハウスは珍しい。

24の個室と相部屋6部屋があり、共用のリビングルームや学習室、シャワールームなどを完備。英会話学校と提携し、講師ら外国人が実際に住む。「入居者の20%以上が外国人」を日本人入居者に“約束”している。日常会話だけでなく、週2回の英会話レッスンもある。

この事業に乗り出すのが、創業間もない複数のベンチャー企業である点も珍しい。

■ ■ ■

中心は2009年創業のベンチャー企業、**彩ファクトリー**（東京）。「英語学習」以外にも、「起業家だけ」、「シングルマザーだけ」といったシェアハウスを東京などで12物件展開しており、いずれも好調。今回、初の福岡進出となる。

彩ファクトリー代表の**内野匡裕氏**（35）は長崎県佐世保市出身。「福岡は空港が都心に近く、アジアとも近い。海外とのビジネスを行う企業は今後も増える成長都市」とみて、進出を決めた。今回の物件も、海外出



福岡市に開業する「英語漬けシェアハウス」を運営する彩ファクトリー代表の内野匡裕氏



内装などを話し合う内野氏（左）や九州レップ代表の白砂光規氏（中央）ら。全員がベンチャー企業の経営者だ＝福岡市博多区

張・赴任の予定や、日常的に英語を使う必要がある働く人が主なターゲットという。

内野氏はもともと、東京のITコンサルティング企業に従事。自身も海外出張を控え、外国人がいるシェアハウスに住もうと探したがなかなか良い物件がなかった経験が、起業の原点となった。

「シェアハウスは何となく安かろう悪かろう、のイメージが一般的にあると思う。ただの住まいじゃなく、何のために住むのかという付加価値を付けて提供する目的特化型のシェアハウスがあるべきだと思った」

■ ■ ■

内野氏の福岡進出を後押ししたのが、これまた2010年創業の不動産仲介ベンチャー、**九州レップ**（福岡市）社長の**白砂光規氏**（39）だった。物件は、九州レップが彩ファクトリーに運営委託する形をとる。内装デザインを手掛けるのも、今年設立したばかりの**福岡リノベース**（同）を切り盛りする**江頭聖子氏**。

彼らベンチャーに共通するのは、現状の不動産サービスのあり方を変えたい、という思いだ。

豊富な実績や人脈を持ち、地場不動産業界ではキーマンとして知られる白砂氏。前職時代に勤務した福岡という街並みや人々に愛着がわき、独立。福岡を中心に、アジアとの取引にも力を入れ始めている。「いつかは福岡の街づくりに貢献したいという気持ちがあった。今回のプロジェクトはその一環。将来はアジアにも展開したい」と話す。

江頭氏も「オーダーメイド賃貸」を会社のコンセプトに掲げ、「入居者がもっと自分らしく住める」不動産サービスを展開していく考えだ。このほかにも複数のベンチャー企業がプロジェクトにかかわっており、異彩な組み合わせに業界の注目も集まっている。

■ ■ ■

志を同じくするベンチャー経営者たちが福岡で挑む、目的特化型のシェアハウス。東京の物件では満室ばかりだが「福岡にどこまでニーズがあるか完全には分からない」（白砂氏）状態だった。

だが、問い合わせは集まり始め、8月初めに福岡市内で開いた入居希望者向け説明会にも20代を中心に約25人が参加。潜在ニーズが小さくないことを示した。8月30日にも説明会を開く予定だ。



日曜日にもかかわらず、多くの参加者が集まった「英語漬けシェアハウス」の説明会＝8月3日、福岡市

面白いのは、説明会参加者の中にベンチャーの経営者が複数いたこと。説明会会場で、ある経営者男性は「自分もこうした事業に関心があり、勉強のためにも住もうと思って参加した」と明かした。内野氏らベンチャー経営者たちによる挑戦が、次の起業家を呼び込んでいるのかもしれない。

内野氏は、福岡の物件に11月のオープン後、当面「住民」としても住むという。「福岡でさらに物件を増やし、ゆくゆくは起業家向けのシェアハウスも福岡につくりたい」と話している。

<http://qbiz.jp/article/65336/1/>